

充実した多様性

——第12回世界俳句協会総会日本総会報告

Yoshihiko Furuta Japan

古田 嘉彦 日本

四月二十九日、東京・板橋グリーンホールで第十二回世界俳句協会日本総会と、それに続く第六回世界俳句セミナーが開かれた。

総会に先立って、二年後の二〇一九年に東京で開催される世界俳句協会大会は第十回の節目であり、また協会設立二十周年にもあたり、来年から準備が始まるという予告がされた。夏石番矢ディレクターからは、今後世界俳句的な俳句観を作っていくかねばならないこと、また国際詩祭で朗読はメインイベントであり、世界俳句協会大会でもそのように位置付けたいという話があった。朗読は、変わったパフォーマンスをしなくても、作者が読むことで伝わるものがある。

また今年九月八日〜十日にイタリアのパルマで開催される第九回世界俳句協会大会について案内があった。

清水国治（以下敬称は全て略させていただきます）の司会による総会では、まず四十五か国、三十三言語による百六十九人の俳句作品、十二か国十六人の俳画、五人の俳論、日本とニュージーランドのジュニア俳句を収録した『世界俳句二〇一七 第十三号』（七月堂、二〇一七）の刊行について報告があった。参加国は二〇一六年の四十八か国から減ったが、人数は増えた。今号から中国在住の詩人の漢俳が初めて入っている。漢字だと意味は日本語の二倍入るため、漢俳は俳句ではないという意見もあったが、排除の論理でなく、俳句にヒントを得てできた新しい詩、俳句に関連した詩として収録した。俳句は二十世紀の前衛的な詩、視覚芸術、聴覚芸術にもインスピレーションを与えている。俳句のそのような動きを考えつつ世界俳句協会は活動している。

会計報告が行われ、最後に出席者全員から自己紹介、活動の報告があったが、その中では翻訳の諸問題が話題になり、盛り上がった。

続いて第六回世界俳句セミナーに移り、夏石番矢の司会で、九名による俳句関連出版物に関する報告、質疑応答が行われた。

まず清水国治により、伊丹三樹彦『わが心の自叙伝』（沖積社、二〇一七年）について報告があった。九十七歳にしてなおエネルギーに活動されている伊丹三樹彦であるが、この本は俳人の自伝はこうあるべきという見本とも言えるべき本だとの感想が述べられた。

夏石番矢が取り上げたジャン・アントニーニとヴェロニック・デュトレイによる『D'UN CHAMP A L'AUTRE (畑から畑へ)』(édition unicit , フランス、二〇一六年)は、フランス俳人一人による三行無韻自由詩の俳句による連句集である。左ページにジャン、通行人による二句A、右にヴェロニック、農婦による二句Bという配置で、五十二対収録という変わった構成になっている。

最初のAは自動車から農場を見ている作品で、Bは農場から農婦が通りがかりの自動車を視野に入れた作品である。日常的な細部があるアングルで切り取ることににより、それらが奇怪な謎めいたものとして見えてくる。いわゆる発句ばかりで季語は無いが、冬から翌年の秋にかけての詩となっている。俳句においては、他者と掛け合いで詠むことにより、一人では見つけられないものが見つかるということが起こる。これはそのような試みとして興味深い。

会場からの質問に答えて、共作の連詩のようなものはシュルレアリズムでも試みられており、その後も作られているが、規則は無いといった歴史が顧みられた。

次は竹凡による『夏石番矢の夢幻世界 選句集の集中的研究』(Cyberwit.net、インド、二〇一七年)の紹介である。これはノルウェー、インド、英国、米国、シンガポール、南アフリカ、日本の七か国十一人の俳句詩人が英訳による夏石番矢の作品を論じた本で、このような本としては二冊目のものである。本人の知らないところで熱心な研究が行われていることに本人も驚いている。竹凡は全員の評から特に重要な文章を抜粋して紹介したが、夏石番矢の作品には、悲しみからの解放、カタルシスがある、そして現代

における世界の共通の問題を題材に詠まれているという評言が、印象的であった。

評の中で取り上げられている作品は、夏石番矢のブログの近作を英訳したもので、良質の翻訳者による斬新な英語の短詩になっている。

古田嘉彦は『鎌倉佐弓全句集』（沖積社 二〇一六年）を取り上げ、代表作、人々の愛誦句の間に広がる広大とも言える挑戦的な試行に触れることができるのが全句集を読む喜びと語った。

鎌倉佐弓は小川双々子門下の俳人武馬久仁裕のエッセイ集『フレンチエよりの電話』（黎明書房 二〇一六年）を取り上げた。世界各地の記憶がちりばめられているが、単に旅行記とは言えず、時間の経過とともにそれが変容していつている。「自分は何を見て、何を記憶に留めるのか、それが創作者にとって、この上なく大切なことがよくわかる一冊でもあった」と評した。

五島高志はルドミラ・バラバノワの『Роса върху бурениге / Dewdrops on the Weeds (雑草の上の露)』（Small Stations Press ブルガリア、二〇一六年）について報告した。作品を厳選したストイックな句集である。その十二句について鑑賞したが、感性の純粋さが伝わってくるとの評があった。

木村聡雄は古田嘉彦句集『展翹版』（邑書林 二〇一七年）を取り上げ、巻末の「工房ノート」をヒントに作品を読み解くことができること、これらの作品は、自分の問への答え、その中間報告ではないかとの見方を示した。形式としては定型に近く、自由律ではないこと、作品世界の特徴としては緊張、不安があること、また散文的に解釈することによって失われるものが多い作品であるとの分析があった。関連して、俳句の新しい方法を見出そうとすること、世界観を更新しようとする動きが、俳句界にもっとあるべきではないかという議論があった。

長谷川破笑はデアン・パブリノビッチの『MILJEČNOM STAZOM / DOWN THE MILKY WAY (天の川を下り)』（私家版、クロアチア、二〇一六年）について報告。自然と自分や家族を題材に、極めて簡潔な表現で詠んでいる。句集は四章から成るが、三番目の「閉じた眼」が評者には最も共感できたとのことであった。また句集を通して、クロアチアのイメージを作ることができた。

出席した日本在住の内モンゴル詩人フフハダ・ブフマンダが自分の俳句的な詩を収録した『Shuvuunii nur (鳥の足跡)』（Artsoft 内モンゴル、二〇一六年）を紹介し、その中から「世界俳句二〇一七 第十三号」に掲載された作品を朗読した。

最後に夏石番矢より、昨年モロッコで出た三冊、シリア在住のモハメド・オダイマのアラビア語訳による夏石番矢句集『空飛ぶ法王』、夏石番矢の墨書、ユギル・ウマッドのアラビア語カリグラフィ、アブデルカデル・ジャムツスイのアラビア語訳による夏石番矢の『三〇俳句』、それに英語、アラビア語などのアンソロジーである『世界俳句』（いずれも Agence de l'ORIENTAL モロッコ、二〇一六年）の紹介があった。

次いで地階のレストランに場所を移して懇親会になった。

ここでは三浦元則氏による筆筈（ひちりき）演奏と朗詠、ついで筆筈と清水国治の龍笛の共演による「越天楽」が披露された。他に和楽器で有名な笙は天の音、筆筈は地の音で、龍笛は天と地を結ぶ楽器だそうであるが、小さな楽器から出る大きく強い音色に、皆しばし陶然とした。三浦元則氏は古典の演奏はもとより、現代曲の初演や劇中音楽等多岐にわたる活動をされており、フィギュアスケートの羽生弓弦選手の音楽にも出演されている。

続いて俳句の朗読が十七名によって行われた。一人一句ずつご紹介する。（向瀬美音はご希望によりお名前のみ記す。）

一 酔ス／舌状回ニ／真善美 石倉秀樹

一 酔舌回真善美

狂ふほど花観て京の旅果てり 歌代美遥

薰風が今日のわたしのイヤリング 鎌倉佐弓

A light, balmy breeze

is

today's my earring Sayumi Kamakura

人間が壊れて春の池にいた 高坂明良

A human, broken,

Was in the spring pond.

Akira Kosaka

小春日や今がどんどん流れゆく

辻村麻乃

Indian summer

Now, the time is flowing forever

It can not stopping

Mano Tsujimura

光のコブラが幾何学教授に落ちてくる

夏石番矢

The cobra of light

falls down

onto the professor of geometry

Ban'ya Natsuisshi

花に雨／心昇華す／坐禅堂

長谷川破笑

Rainy in blooming

my mind sublime

in Zazen hall

Hasho Hasegawa

つかのまの温み残す歩冬回廊

清水国治

Each step leaves

Faint warmth —

Winter corridor

Kuniharu Shimizu

寝過(う)つてひとり降り立つ銀河かな

五島高資

I rode past my stop as dozing

and stood still alone at the terminal station

in the Milky Way

Takashi Goto

春めくや石庭に生まれさう

佐怒賀正美

信じ難いほど多くの足跡売る屋台

古田嘉彦

A stall

selling incredibly numerous

footprints

Yoshihiko Furuta

フフハダ・ブフマンダは鎌倉佐弓の「ポストまで歩けば二分走れば春」他の句をモンゴル語に訳して朗読した。

背負うもの最少にして寒雀

早乙女文子

老人が散りゆく花にハーモニカ

里村無限

The old man plays the harmonica for falling petals

Mugen Satomura

支笏湖群青にとどかぬ風花

干野風来子

我 是 誰 之 四 十 光 年 春 之 星

竹 凡

我 究 竟 是 誰 漸 到 達 四 十 光 年 遥 望 春 天 星